≪情報美学研究会≫

西宮神社十日戎開門神事
―改暦からコロナまでの変遷に着目して―

明石工業高等専門学校　荒　川　裕　紀

1.「十日戎開門神事福男選び」との出会い

西宮神社十日戎開門神事とは、毎年1月10日、午前6時の開門と同時に本殿までの境内を走り抜けた1番手から3番手までの参拝者を「その年の福男」として認定する行事である。約6000人が参加する陸上競技会さながらの勢いのあるこの神事は、毎年、阪神間の恒例行事としてメディアに取り上げられている。赤門からスタートし、直線やカーブのある本殿までの境内の道、全長約230mのコースである。(現在の拝殿正面からゴールする形態は昭和60年頃に変更されたもので、それ以前は拝殿の横からであった。)

私が西宮神社十日戎開門神事の調査をはじめたのは、1996年、大学1回生の頃である。きっかけは、高校2～3年生の時のアメリカに留学にある。留学先のジョージア州は、人種差別の問題が強く残る地域であり、またバイブル・ベルトともいわれるプロテスタントの信仰が篤い場所だった。私も毎週日曜と水曜にホストファミリーに同行して教会に行く機会を得ていた。留学中の1995年1月17日に阪神･淡路大震災が起こり、私は家を失い、母校が全壊し、友人を亡くした。そんな時、アメリカの友人は「心配するな、君の友人は神様の計画で召されていったのだ」と手紙に書いて私を慰めてくれた。それまで私は、文化とは表象であって、教会に行く行為自体が大切なのだと思っていたが、この手紙をもらい、初めて彼らの信仰する一神教という考え方に自分は全く触れてはいなかったのだということに気付かされた。しかし、日本はどうなのかと問われた時、私は何も答えられなかった。これが契機となり、私は日本の宗教文化や祭礼、巡礼に興味を持ち、人類学や宗教社会学の分野に進むことを決意した。

帰国後の1996年1月、大学受験の頃に、偶然テレビの夕方のニュースで西宮神社十日戎の「福男選び」の映像を初めて見ることになった。門がバーンと開いた途端に、男たちがすごい勢いで駆け抜け、拝殿に飛び込む様子であった。私の生まれは大阪、育ちは阪神間で、西宮神社の氏子であった。七五三参りや御神輿担ぎなど、西宮神社は子どもの頃からずっと身近な存在であったのに、「福男選び」はその時まで知らなかった。自分の知らない日本の文化が、とても身近なところにあったことに驚いた。その後、甲南大学文学部社会学科に入学し、森田三郎先生のもとで学ぶこととなったが、森田先生は、常々研究のフィールドワークの対象を1つに絞るのではなく、様々な場所に持ちなさいとおっしゃっていた。そこで私は、まず最も身近に調査が可能な西宮神社を選んだのである。少し遠いフィールドとしては四国遍路、そして海外と3つのフィールドを研究対象にした。またそれと同時に、社団法人神戸ゴルフ倶楽部で5年間キャディーのアルバイトを経験することによって阪神間文化を身を以て体験した。

2. フィールドワークとしての十日戎開門神事

ちょうどその時期、森田先生が沖縄で開催された学会で出会われた『おきなわキーワードコラムブック―事典版』という書物が非常に面白かったので、ゼミで「阪神文化辞典」の製作を企画することになった。その過程で、私は「十日戎開門神事福男選び」を取り上げたいと思い、歴史的な背景などの調査を開始した。森田先生からは「参与観察」として神事の最前列で走ることを勧められ、1998 年 1 月実際に実行する運びとなったのだが、その時の経験は忘れ難く、今の研究の原点となっている。門が開き、もみくちゃな状態から飛び出すその瞬間、自分の記憶は飛んでいて、通常とは全く異質の状態を感じた。これは、柳田國男のいうケ（日常）の状態からハレ（非日常）の状態に成ったということなのではないかと思った。他の参加者たちも、門が開いたら一面銀世界のようだったなどと、似たようなことを話しており、まさにこれが祭りなのだと思った。ゼミでやっていた映像人類学の関係から、記録映像として撮影していた先輩方は、これは「祭り」ではなく、「イベント」だと思ったと話した。だが、私は逆に、「ケ」から「ハレ」へと体感することのできたあの瞬間が含有されたこの神事こそ祭りなのだということを体感し、もっと調べてみたいと思ったのである。

明治 32（1899）年 2 月 19 日、大阪毎日新聞の記事には、このような記述がある。

> 毎年 1 月 10 日大祭の前夜、居籠りといって氏子の人ら皆、年始に祝って立てた門松を逆さに吊り、門戸を閉じ、菰または莚を垂れて、終夜外に出ず、声や響きを留めて居籠り、翌日未明、各々の戸を開き、争って社参する。世にこれを十日戎と称する。

現在の認識では 1 月 10 日、11 日にお参りすることが十日戎だと思われているが、ここでは、忌籠を終え、門が開き、走って社参したことが十日戎のエッセンスであると書かれている。このことは、私自身が開門神事に参加して感じた本質的な部分と合致していた。

摂津名所図会（1796 年）

江戸時代の『摂津名所図絵』（1796 年）には、このようなことが書かれている。

毎歳正月十日は居籠祭とて、九日の夜には、此御神廣田社へ臨幸まします。神像（かむたち）の悪きにより、人目をはづかしくおもひ給ふ諺ありて、市中の民家ことごとく門戸をかたく閉ぢ、筵・簾など垂れて、門松を逆さに立てけり。内には遠近の親しきやから、知己の者多く来りて、酒のみ、豆腐の串焼し、羹などを調へ、一夜禁足して、物静に神祭をつとむ。早鶏鳴の頃より、近隣の参詣あれば、社頭も賑しくなりて、市中も門戸を開き、みなみな本社へ詣す。

ここでは、神社周辺の人たちが 9 日の夜を謹慎状態で過ごし、夜明けに、いつもと違った状態でお参りしていることが記されている。

3.「忌籠（イゴモリ）神事」と十日戎

忌籠とは、前西宮神社宮司の吉井吉隆氏によると、「厳重な忌籠りによって常人の状態と異なった神に近づく清浄な身体に身かわりをして、翌日十日戎に参詣するに適した神人和合の境地をつくり出す、精神的諸準備を行う神道的行事」であるという。柳田國男の 1940 年の論考「日本の祭」の中でも忌籠の事例があり、日本の様々な場所で行われていたことが分かる。西宮神社では、忌籠の他に御狩（ミカリ）神事などとも呼称されており、そこには身代わりの意も見て取ることができる。

4.　改暦と阪神電鉄の開通

明治になると、十日戎は思わぬ発展を遂げる。そもそも西宮は地理的にも興味深い場所で、江戸期より西宮神社には多数の参拝客があった。山陽道にあり、京都と大阪の分かれ道に位置していたため、人や物が多く集まっており、宮水の発見も相まって酒造業を筆頭とした産業都市でもあった。

暦に目を向けると、国家的には明治になると改暦によって新暦が使われはじめたが、これはあくまで官公庁を中心とした大都市部に限ったことであり、明治 40 年頃まで、公文書などは新暦と旧暦が併記されていた。一方、交通の要衝であり、産業都市であった西宮も人々の民俗的行事は旧暦で行われていたのである。

明治 26（1893）年 2 月 26 日（旧暦 1 月 10 日）、大阪朝日新聞の記事には、「本日は旧暦の正月十日なれば西の宮の戎神社へ参詣するもの多きにつき本日梅田神戸間臨汽車を出すことに」と書かれている。当時はまだ阪神電鉄は開通しておらず、官鉄（現 JR）が臨時汽車を出し、多数の乗客を西宮へ運んでいたというのである。当時は、大阪の今宮戎や神戸の柳原蛭子では新暦の 1 月 10 日に十日戎を行っていた。ただ総本社である西宮神社においては、旧暦に詣でるという棲み分けがなされていたのである。その結果、官鉄が西宮以外の参詣客を運んでくることとなり、江戸期よりも西宮神社の十日戎が盛んになった。

1905（明治 38）年、大阪と神戸を結ぶ阪神電鉄が開通する。のちに開通する阪急電鉄は沿線上に宅地開発も同時に実施することによって、多数の人々を住まわせようとしていた計画が交通史などではよく取り上げられるが、開通当初の阪神電鉄については、週末に人々を名所・名勝へ向

かわせるような働きかけを専ら行っていた。1908年には「阪神電車唱歌」というテーマソングを作っている。その歌詞の中で、西宮は「戎の神の参詣の　老若つどふ西宮　御前の浜の風景は　歌にも詩にも尽くされず」と書かれており、観光のコンテンツとして西宮神社があったことが分かる。

明治40（1907）年の社務日誌からは、阪神電鉄が西宮神社に十日戎をアプローチしていたことも分かる。阪神電鉄（日誌には電鉄会社とのみ記載）による特別な祭典が新暦の十日戎に開催されていたことや、明治40年の恵方が大阪からみると西宮の方角であったこともあり、西宮神社への参詣のため戎停留所に2棟の待合所を新設、数十におよぶ参道へ電灯の設置、美観を供えた6基のガス灯が設置されたことが日誌に記されている。その後、阪神電鉄は十日戎期間中には24時間運転をはじめ、神社には終夜人が訪れるようになる。

明治40（1907）年1月11日、大阪朝日新聞には「本通り筋戎停留所間は非常に雑踏を極め西宮署の警官は非番総出にてこれを警戒したり」と書かれている。それまで西宮の町では新暦の十日戎を祝う習慣はなかったのだが、大阪から多くの人が訪れるようになり、旧暦の併記がなくなる明治の頃には新暦の参詣者数が旧暦の参詣者数を凌駕することとなった。この時には先述の忌籠については旧暦において、西宮神社境内でのみで実施していたのだが、新暦でも行うようになった。だが、その当時の大阪や神戸からやって来た人たちは忌籠を知らないので、深夜に電車に乗ってやってきた人たちは神社に入ろうとすると門が閉まっている。神社内では忌籠をするため、12時以降は門を閉じ、境内の外に参詣客を追い出す必要があった。そこで、参詣客との間で、朝の6時に開門することが取り決められた。この時から、朝の6時に開門する赤門の役割が人々に注目されはじめることになる。大正2（1913）年1月10日、大阪朝日新聞神戸附録には「今暁5時を期して例の「門開け」を為すのであるがこの門明（ママ）に先登第一の魁けをして神殿へ駆けつけ誰よりも先に鈴の紐に執りついたものは偉大の福運を授かる」と書かれており、この時既に一番に辿り着くのが良いことだという認識がなされている。

5.「福男」の誕生

当時の新聞記事を見ていくと、この開門競走が大正年間に恒例行事として認知されているのが分かる。

「10日の西宮は本戎に一番福を授からんと午前5時の開門を待って参詣者ドツと押し寄せ之に続いて午前89時頃には境内一面人を以って集まった」（大正3（1914）年1月11日、大阪朝日新聞神戸附録）

「今日は即ち本戎で未明から昔ながらの忌籠祭と云うのが行はれ6時開門と同時に一丁余も綱になつて押しかけた参拝客が第一の福を授からんものと社前までのマラソン競走いつもの通り幸ひ怪我人のないのが不思議な様なり」。（大正9(1920)年1月10日、大阪朝日新聞神戸附録）

「午前6時の開門には一番鈴の功名を争う人がぎつしり詰めかけ開門とともに拝殿へ福争ひの競走」。（昭和10（1935）年1月11日、大阪朝日新聞阪神版）

昭和に入ると、記事上に走った人の個人名が出てくる。昭和 12（1937）年 1 月 10 日付けの大阪朝日新聞阪神版には、見出しに「もの凄いダッシュ！一番乗り競走　けふ西宮戎神社の十日戎朝六時に開門す」とあり、本文には

「こゝ数年間は西宮市久保町千足材木商店の田中太一さんが、多年の修練と、健脚にものをいはせて、よく諸豪を抑へて一番乗りの覇権を維持してゐたが昨年は家事の都合で缺席、同市社家町清田三郎君に名をなさしめた、ことしはこの兩君も揃つて出場するといふが、そのほかに虎視眈々覇権を狙ふダーク・ホースも多いことゆゑ面白い場面が展開することであらう」

とある。

大阪朝日新聞

昭和十二年一月十日（日曜日）

阪神版

もの凄いダッシュ！

一番乗り競走

けふ西宮戎神社の十日戎

朝六時に開門す

鈴を目がけて

雨にめげぬ

宵戎の參拜者八萬

岡田知事も福を得に

東邦、合同の合併

特に反對せず

料金値下などの言質を得て

縣當局の意見決る

他都市で

西宮戎神社の宵戎と參拜の群衆

1937 年 1 月 10 日大阪朝日新聞阪神版

同日の夕刊には、

「今年の戎サン一番乗りは誰だらう、一兩日前から市民の興味はこの一點に集注されてゐたが、果然西宮市久保町千足材木店の田中太一さんだつた。終夜大門の内側に屯して護る消防隊 2、30 名と警官 4、5 名が實に手際よく太鼓の音を合圖に重い扉をサツとあけると門外に待機した三千人はワーツと歓聲をあげて境内になだれ込んだ、この最前列の 2、30 人の中からスタートダッシユ物凄く地下足袋に、軽装の男が十数名脱兎の如くとびこんだ、がゴール直前の追い込みをきかせ、今年も最初の鈴を掴んで凱歌をあげたのが彼氏だ『勝つた！！一番だ、一

番だ』と高らかに勝名乗りをあげる彼氏は21歳の時に西宮へ来てから本年37歳まで昨年を除いて16回、覇権を獲得、めでたきレコードを樹立した」

と書かれている。

このように西宮の都市化に伴って現われた「新住民」が、新暦の祭りの担い手に加わっていたことが分かる。田中さんは通算18回「福男」となり、新暦十日戎の花形であった。足が速かったのはもちろんだが、連続して一番になったのには理由があったようである。田中さんのご遺族にお話を伺ったところ、興味深い話を聞いた。田中さんは、毎日西宮神社にお参りに行き、参道の掃除をしたり、青年団にも所属されており、西宮神社に貢献する活動をされていたという。私としては、周囲の人たちが、あれだけ信心深い人なのだから、彼に一番を取らせてあげようとしていたのではないかと推察するのである。

1938年1月10日大阪毎日新聞阪神版

それにしても、当時これほどまでに走ることへの関心が高まっていたのはなぜだろうか。それは、社会的な状況が背景としてある。1938（昭和13）年1月10日の大阪毎日新聞阪神版に次のような記事がある。見出しに「縁起物も軍國調」、本文では

「『商売繁盛笹持つて來い』の商い神の戎さんも『鉄砲持つて來い』の戦争に影響されて、華やかな初春の祭禮も事變色がにじみ込んで随所に軍國調を奏でてゐる、その二三を拾えば―

今宮戎の拝殿には大旆に『祈皇軍武運長久』と記されてあるのも心強く、堀川戎神社では社司の令息の『祝入営』の長旗が翻つてゐるのも勇ましい　露店商人もぬからず縁起物を時局に因んで、『福髭』は『皇軍大捷部隊長髭』『福俵』は『俵ころころ南京入城』『竹梯子』は『敵前上陸戦勝はしご』となりその他『武運長久吉兆』などと名をつけて呼び立て、それがまた参詣者の人気に投じて面白いほどの売行を見せ赤襷に赤鉢巻の商人たちが戎顔を見せてゐた」

と記されている。戦時色が強まっていたことと、1940年に開催される東京オリンピックの影響からスポーツ全体への興味が高まっていた時期でもあった。西宮では当時、スキーのジャンプ大会が阪神甲子園球場において1月10日に開催されている。新聞記事は、大会終了後に観衆が雪崩をうって西宮神社までやって来ており、その数は十数万という空前の人出であったと伝えている。

本社主催・スキー・ジャンプ甲子園大會

青空下に銀雪蹴って
飛躍日本の雄たけび
鐵傘を搖がす四万大衆の興奮
木村選手（小樽中出身）優勝す

大會記錄

1938年1月10日大阪毎日新聞阪神版

昭和13（1938）年1月11日、大阪朝日新聞阪神版には、「善男善女の群　西宮の十日戎　唐門の一番乗は田中、尾松両氏　郊外電車も轉手古舞」と題して、次のような記事がある。

「午前6時太鼓を合圖に開門すれば、一番福を狙って門前に待機の善男善女三千人がどつとばかりなだれこみ、境内数ヶ所に燃えさかる篝火をたよりに本殿の鈴をめがけて殺到、いつもは閉ざされている唐門もサツと左右に開いて一番乗りを迎へ入れる。16年間一番乗りの覇権

を維持する西宮市久保町千足材木店の田中太一さんと丹波氷上郡春日部村の尾松新之助さんの二人が同時に掃き清めた斎庭にとびこんで目出度く凱歌をあげ」

当時田中さんは40代、尾松さんはまだ若かったようである。おそらく、本当はどっちが一番だったのか微妙なので、西宮神社の裁定によって両名とも一番福としたのだろう。それまでは出来レースの側面もあったが、この時を境としてレースへと変容を始めたのである。実際に足が速い人が福男になるいうことが、ここからはじまった。社務日誌には、この年初めて「先登第一ハ例ノ千足材木店田中太一」と参詣者個人についての記載が出てきている。西宮神社には生前の田中さんが植えた桜の木があり、現在では開門神事の順番選びを、この桜の木の下で行っている。田中さんが福男として西宮神社に貢献されて以降、開門競走は速さを競うレースになっていく。

福男に新人現はる……

—連福十八年の田中さんは三番—

山室光子さん を囲んで

1939年1月11日大阪毎日新聞阪神版

昭和14（1939）年1月11日、大阪毎日新聞阪神版には、「福男に新人現はる」という見出しがある。記事によると、この年は、田中さんの同僚の多司馬氏の兄弟が出場し、一番手となっている。田中さんに続く福男を、西宮の人で覇権を維持しようとしていたようである。また、この年の大阪毎日新聞の記事にて初めて「福男」の語句が使われている。

の飜譯
正義日本の紹介に
ヒルバーン教授
深夜の一番福爭ひ
西宮戎の人出實に盛況
兄の激勵と友情に答へて
巨石に水鹽供ふ
名譽の戦傷者

1940 年 1 月 11 日大阪朝日新聞阪神版

昭和 15 年には、多司馬兄弟の記事がある。昭和 14 年に出征した兄は、戦地中国から弟へ宛てた手紙に「輝かしい興亜新春の一番乗りはきつとお前ががんばつてくれ」と書いている。弟は「兄が敵陣を占領したあの気持ちでかならずやらう」と決意し、目出度く一番乗りした彼は、「兄さんやりましたよ」と感激の叫びをあげたという。そして彼は、当時の吉井社司より一番手の名乗りを受け、晴れのご褒美として御供米やお箸と兄勇士のお守札を戴いたという。神社側が福男を祝い、副賞を授与するようになったのは、この時が初めてである。

6.「創られる伝統」1930 年～ 40 年代の福男たちの群像

大阪毎日の紙面には「福男は勇士の弟だ！」という大きな見出しがでている。時局もあり福男も「勇士」となる時代であった。開門競走は昭和 20 年まで続けられる。昭和 20 年 1 月 11 日、朝日新聞阪神版には「十日戎　防空服装で戦勝祈願の決戦色氾濫　西宮神社の十日戎は早暁から戦勝を祈る参詣者がつめかけ、（中略）境内には方面委員提唱の軍用機献納資金募集や西宮郵便局から出張した数班の弾丸切手賣場が時局色を濃くしともに非常な好成績ぶり、なほ恒例の拂暁一番参りは市内川西町の上田研蔵君が獲得した」という記事がある。戦時中で紙面がタブロイド判になっても、開門競走に紙面が割かれているのである。

上田研蔵氏（1999 年撮影）

この昭和 20 年の一番福である上田研蔵さんにお話を伺った。上田さんは、当時、旧制関西学院中学 5 年生（現在の高校～大学生にあたる時期）。新聞に書かれているように戦勝を祈願して走ったのかと訊ねると、実際は一番になったら一抱えもある大きな鏡餅をもらえ、有名にもなるとの思いから参加したとのことであった。開門前では、他の走者とけんかをして最前列のスタート位置を守ったそうである。当時の関西学院の生徒たちは、阪急甲陽園駅から上ヶ原まで徒歩通学していた。上田さんは遅刻間際に毎日走って通学していたために、脚力がつき、福男につながったのだろうとおっしゃっていた。関西学院大学時代は体育会拳闘部で日本一になるなど、その後もスポーツで大活躍されている。

この頃、阪神間に電鉄が住宅地開発を推進し、さらに多数の学校を誘致した。その結果として、若年層が増加し、いつの間にかこと開門競走が各学校の足自慢が集うインターハイ的な存在にもなっていたのではないかと推察している。電鉄の郊外開発が、開門の一番競走に寄与したといえよう。資料として、阪神電車、阪急電車の郊外開発の年表を記しておく。

年表：えびす信仰と阪神阪急　―参詣電車から「郊外開発」の電鉄会社として―

明治 38（1905）年	阪神電鉄（出入橋―三宮間）
明治 41（1908）年	阪神電鉄、『市外居住のすゝめ』発行
明治 42（1909）年	阪神電鉄、西宮駅付近に貸家 30 戸建築
大正　9（1920）年	阪急電鉄神戸線（梅田―上筒井間）開通
同年	旧制甲南高等女学校開校
大正 10（1921）年	阪急電鉄西宝線（西宮北口―宝塚）開通
大正 12（1923）年	旧制甲南高等学校（七年制）開校
昭和　2（1927）年	阪神国道電軌開通（野田―東神戸間）
昭和　4（1929）年	関西学院、上ヶ原へ移転

7.「えびす」と福　戦後から平成まで

昭和20年8月の西宮空襲では南門と拝殿が焼失する。しかし、戦後も一番詣りが続けられ、電力制限のかかった真っ暗な中を走っていたそうである。昭和20年代後期から昭和30年代にかけて参加者は増加し、変遷はありながらも昭和晩期まで福男競走は続けられた。

昭和30年代頃になると、開門競走の走者間で争いが起こり、徐々に統制の取れないイベントになってきた。昭和36（1961）年1月10日の神戸新聞夕刊には「サイ銭箱のフタでなぐり合い　開門のことからケンカ」という記事がある。当日の午前4時50分頃、表門（赤門）の外で開門時間を巡って、一部の男たちが殴り合いのケンカをし、西宮署員に現行犯逮捕されたという事件である。治安が乱れ統率のとれない中、翌年も祭りは続けられた。この頃からレースが過激になり、場外での騒ぎもあったことから警察の指導が入り、昭和41年から3年間、神社は門を開けるが福男の認定は行わないということになった。これ以降の新聞記事は、神社を参詣数などに関するものが多く、福男競走を扱った記事がほとんど見られなくなる。世間の関心も低下していった。

その一方で、モータリゼーションにより、自家用車や貸し切りバスなどで西宮神社に参詣する人は増えた。阪神間のみならず、近畿の広い範囲でえびす宮総本社としての西宮神社が認知されていく。特に、えびす信仰の強い漁村地域（兵庫県北部、四国、淡路島など）からは、昇殿し祈祷をしてもらうために人々は団体でやってくることが多くなった。昭和50年代頃より、彼らの中から福男になる人が現われ始めてくる。昭和54年、55年の福男西上喜代松氏は兵庫県北部香住の人である。漁業の町である香住は、大正時代から続く水産加工業（焼きギス製造）がある。その代参組織が縁で、西上喜代松氏は西宮神社に参詣し、開門競走に参加することになった。父親に誘われて走ってみたところ初参加で一番になり、その翌年も福男となった。だが、三年目は父に止められ、競走への参加を見送ったのである。父親は、一度目と二度目は家族と加工組合に福をもたらしたのだから、今度はその福を人に与えるべきだと言ったそうである。西宮神社の福は多くの人に分け与えるから福の神なのだと。

福男の副賞である、えびす神像を持つ西上喜代松氏

彼ら漁業関係者がえびす信仰のもと走り参りをしたことにより、開門競走は単なるイベントではなく、そこに信仰心があることを阪神間の人たちが気付きはじめたのである。えびす信仰をもつ漁村地域の人々によって、福男レースに新たな意味が付与されたと言えよう。

昭和64（1989）年1月7日に昭和天皇が崩御された。自粛ムードが広がる中ではあったが、バ

ブル真っただ中の金融関係者や商工人たちにとっては福の神に詣でたいという気持ちを高めていた。元号が変わった平成元（1989）年1月9日、朝日新聞阪神版によると「十日は午前六時の大太鼓を合図に開門する。開門時には初参りの縁起をかついで参拝者が一斉に本殿へ走り、到着順に一番福、二番福、三番福の福男三人を決める神事があり」とある。

これまでは、神事は忌籠であって、門はその後に開けられるだけであった。だが、この記事によると、門を開け、福男を決めるところまでが「神事」であると書かれている。また、それまでは走者たちが自発的に行っていた福男競走が、神社側が「福男三人を決める」ものへと変化した。つまりこれは、祭神である、えびす様が福男を選ぶという、「神様ごと（神事）」であるとした訳である。昭和から平成にいたる1989年、自粛ムードの中、普段通り十日戎を遂行したい神社側の苦肉の策であったとも言えよう。

8. 創られた神事になぜ多くの人が集うのか

マスメディアや、主催者である神社による働きもあり、次第に「神事」によって福男が「選ばれる」という認識が定着しはじめる。阪神・淡路大震災の翌年、平成8（1996）年の開門神事は、福男三人が被災した若者だったことから復興の願掛けとして報道された。走者は阪神間の人たちが多かったので、総体的に被災者が多かったともいえるだろうが、被災した人が福男に選ばれたというメッセージ性が付け加えられた。平成10（1998）年1月10日、産經新聞夕刊の記事には「えべっさんも注目　つわもの1200人　境内疾走」という見出しが出ている。

実際に参加者へのインタビューを行った際には「いつもとは違う感覚で走った」「ただのレースではない特別なもの」などといったコメントを多数得ることとなった。午前6時を皮切りに開門する、つまりケからハレへ変わる瞬間（時間の分節化）が生まれ、参加者自身が「選ばれる」感覚に共感するようになってきているのではないだろうか。

改元、震災などがありながらも、上記のような機能を神社は上手に取り入れながら神事を行ってきた。1997年頃に在京のキー局が開門神事をテレビ番組で取り上げたことにより、全国的に関心が高まり、参加者数は急増していく。参加者は東京や北海道など、全国からやって来るようになり、2000年までに1000人を突破し、現在では5000人を超える人々が参加している。多くの人が参加する背景には、特別な準備もなく誰でも参加でき、同時に、非日常の神事が味わえるという両義性にあるのだろうと推測する。

ところが、誰でも参加できるということが逆手に取られて、2004年に新たな事件が起こる。とあるテレビ番組がきっかけとなり、ある消防士の団体が一週間前から最前列に並び、組織的にスタートの位置取りをしてしまったのである。その団体の一人が一番福となったものの、抗議が殺到し、一番福返上という事態になった。神事が急激に巨大化したため、既存のルールが機能しない状態に陥ってしまったのである。この事件以降、参加者や調査者たちが「開門神事保存会」を結成し、2005年より活動をはじめる。最前列の順番決めは、氏子の青年団の人たちとくじ引きで決める形での催行と変化していった。その後、この保存会は、2008年には正式に西宮神社の「十日戎開門神事講社」へと発展した。くじ引き、整列、開門までを「元参加者」が諸団体、県警、警備員と一緒になって行う形へと変化した。参加者が神事の実行者へと変化した稀有な事例であると言えるだろう。これまでの日本の古いコミュニティではなかなか起こりえなかった新しい形

であるのかもしれない。

現在、十日戎開門神事講社は次のような取り組みを実施している。①福男と地域の交流を促すために福男が「西宮まつり」などへ参加、②「学び舎と地域を繋ぐ初戎」として明石高専学生が神事に参画、③阪神間文化の「生きるコンテンツ」として様々な形で発信。以上を通して、文化を広めていく取り組みをしている。

9. コロナ禍での「開門神事」

2021 年 1 月 10 日の開門神事（開門神事講社撮影）

2020 年より急速に感染拡大した Covid-19 によって、日本国内における祭礼、イベントなどは中止や延期が相次いだ。その中で、西宮神社は神事を継続して実施することに力を入れた。9 月の例大祭「西宮まつり」においては、参加人数、船団数は縮小したものの、祭礼自体は実施し、感染症対策を施した上で「伝統の継続」を遂行しようとした。「西宮まつり」を終えた後、神社、開門神事講社、自治会、警備会社で今後の神事の催行について協議がなされた。当初、開門神事は 12 月中旬までに希望者を募り、抽選で 80 名を走らせる予定であったが、12 月中旬の Go To トラベル延期を受け、中止の判断を下した。しかし、開門神事自体は執り行うこととなった。例年通り午前 6 時に門が開き、20 人ほどの講員が距離を取りながら歩いて境内に入り参拝をしたのである。神社としては、福男の認定はしないが、門を開けることこそが西宮神社の伝統だとの考えから開門神事を執り行った。

10. まとめ

西宮神社十日戎開門神事は、江戸期まで市中で実施されてきた習俗「居籠（忌籠）」からはじまった。明治の改暦によって、都市部（大阪や神戸）では比較的早くに新暦での十日戎が実施されていたが、西宮神社では「旧暦の十日戎」として知名度があり、官鉄によって、都市部から参詣客が西宮に運ばれることとなる。暦の新旧による十日戎の棲み分けがなされていた。また、民衆に

おける各行事の改暦（明治40年代の公文書での旧暦並記廃止）と、阪神間のインターアーバンとしての役割を持つ阪神電鉄の開通により、新暦による十日戎が電鉄自身の働きもあって創出される。

都市部からの参詣客（当初は恵方も気にしながら）の増加とともに、旧暦の祭礼の習慣（居籠）も取り入れ、新暦の西宮神社十日戎が定着した。電鉄による24時間運行のため、終夜を問わず参詣客が境内に立ち入るようになったことに頭を抱えた神社は「0時閉門、6時開門」を取り決めた。これにより表大門の役割が増したとともに、門前で開門を待ち構える参詣客が増加し、「一番参り」が注目を集めるようになった。

1937年より、一番参りを成し遂げた個人の名前が新聞紙上に出るようになった。また、この年の暮れの南京入城に代表される、戦時色が強まった1938年以降は、走者の足の速さが注目されるようになった。戦後、軍国調は抜けるが、福男競走は継続した。だが、門前でのケンカが多発し、その危険性から警察の要請の受け、昭和40年代からは休止になった。この頃より、新聞紙上も福男競走の記事は少なくなり、参詣客数に着目したものが多くなる。そして、モータリゼーションにより、より遠方の参詣客が増加していく。昭和50年代には、兵庫北部香住の漁業関係者が福男になることが増え、これによってえびす信仰の側面にも注目されるようになる。

昭和天皇崩御前後の自粛期には、居籠を開門まで引き延ばして、神社側が「開門神事」「福男選び」の語句を創出し、神事という認識が一般に定着した。この頃、阪神・淡路大震災が起こる。同時期にテレビの全国ネットで放映され、開門神事が全国的に認知されはじめる。2004年に「消防士場所取り、走者妨害事件」がネットの掲示板から拡散され、「お祭り」状態となった。これ以降、参加者が「神事保存会」を結成し、開門や祭礼の奉仕を行うようになり、その後、保存会は神社の正式な講社となった。このように、イベントから地域創生が期待される神事となったことは、公共人類学という分野からも着目することができる。

2020年のコロナ禍においては、当初、神社と講社は伝統の継続を望んでいたが、感染拡大の収束が難しいと判断し、神社による福男の認証はせず開門神事のみを実施することにした。この点は、SNSを含めた諸メディアで概ね評価されている。

11. 考察と課題：開門神事の特徴と将来への可能性

西宮神社十日戎開門神事は、古来の習俗が都市の発展の中で進化したものである。電鉄による、参詣活性化、郊外開発、大学・学園の開校誘致などによって、西宮が都市化していくなかで、旧弊にとらわれない若い力、文化がそこで醸成された。また、戦意高揚（戦中の戦勝祈願）や戦後の降盛（自由市場の延長が十日戎開催時に誕生）、また震災復興の祈願（「復興の神」）など、その時代の人々の「福」が投影され、常に多義性を帯びたものでもあった。レジリエント（しなやか）な文化であるといえるだろう。

西宮神社が戎の総本社となったのには、室町時代に全国を人形浄瑠璃で行脚した傀儡師たちの影響がある。彼らは、自分たちが西宮からやって来た者で、戎が鯛を釣る戎舞を各地で披露し、西宮神社こそが戎神の総本社であることを世間に広めていった。まさに傀儡師たちがメディアとなっていたのである。このようなメディアとの付き合い方は、現在の西宮神社でも受け継がれているように思う。現在の権宮司さんは、十日戎といえば今宮神社の福娘が有名だが、この十年で

それを福男に変えたいとおっしゃっている。また、日本のみならず海外にも福男の知名度は広がっている。YouTube で「福男競走」と調べてみたら、様々な動画が上がって来る。漢字文化圏の人ならば「福」の意味は伝わるので、香港、台湾、大陸と、海を超えて認知されているようである。

これまで見てきたように、開門神事は、非常に自由度の高い祭礼であることから、これが祭礼、神事なのかという問いが常にある。だが、国籍、性別に関係なく誰でも走ることが出来るという面白み、許容度の高さは、この神事のもつ特徴であろう。このコロナ禍において、開門神事が今後いかに変化していくのか、注目したい。そこから社会の縮図が見えてくるのではないだろうか。

【参考文献】

芦田徹郎『祭りと宗教の現代社会学』2001，世界思想社
大江時雄『ゑびすの旅—福神学入門—』1985，海鳴社
西宮神社編『西宮神社』2003，学生社
平山昇「明治・大正期の西宮神社十日戎」2010，『国立歴史民俗博物館研究報告　第 155 集』pp.151-171
吉井貞俊『福の神えびすさんものがたり』2003，戎光祥出版
柳田国男『定本柳田國男集第 10 巻』1969，筑摩書房 pp.189
米山俊直『祇園祭　都市人類学ことはじめ』1974，中央公論社
米山俊直『都市と祭りの人類学』1986，河出書房新社
成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻田中宣一研究室編『えびすのせかい　全国エビス信仰調査報告書』2003，成城大学

※今年度、兵庫県「ポストコロナ社会の具体化のための調査検討費補助事業」に採択（代表：荒川裕紀）され、今回の報告に関しては調査対象となった西宮神社の祭礼の実践、参与観察の成果の一部を提示している。

（2021 年 2 月 19 日、生活美学研究所本年度情報美学研究会における講演に基づく）

コーディネーター　武庫川女子大学情報メディア学科教授　藤　本　憲　一